

でんぞういなり

## 伝蔵稲荷

むかし長久保宿ながくぼじゆくのはずれに伝蔵でんぞうという人が住んでいました。伝蔵は貧しかったがまじめで働き者でしたから、「伝蔵さん、伝蔵さん。」と行って、とつてもかわいがられていました。

お人よしで働き者の伝蔵に困ったことがひとつありました。それは、伝蔵がときどき狐きつねに化かされることでした。

今日も朝からうつろな目をして狐のように「コンコン」とないてみたりピョンピョンはねたりして久津根稲荷くつねいなり様さまと自分の家を往ったり来たりしたかと思うとお稲荷様の周りをいくどもいくどもわけのわからないことをつぶやきながらものに取りつかれたようにぐるぐるまわっているのです。

近所の人たちがみかねて、「伝蔵さんどうしただい。」と言って、伝蔵をなだめて家につれて帰り、その日は無事に終わりました。

次の日の朝、昨日のことが心配になった近所の人たちがおそるおそる「伝蔵さん、おはようごわす。」と、声をかけると、中から、「朝早くからだれでござす。」と、伝蔵さんの元気な声が帰って来ました。

みんながポカンとしていると、伝蔵の家の玄関の戸が中からガラッとあいて「やあみなさんおそろいで、なんかありやしたか。……」まじめでお人よしの伝蔵さんの柔和な笑顔にゅうわをみてみんなほっとしました。

「きんなはどうしただい。」一人が声を掛けると、「わし、きんな、なんかしやしたかい……。」伝蔵さんは昨日のできごとは全く知らないようです。

お人よしでまじめな伝蔵さんの顔をみると、近所の人たちも昨日のできごとをどうしても聞く気になれません。「伝蔵さんが元気でやってりゃあいいだわい。」近所の人たちは、そそくさと伝蔵の家から立ち去りました。

そんなことがたびたびありました。「どうもおかしい。ただじゃあねえぞ。狐がついているじゃあねえかなあ……。」一人が言いだすと「そうだそうだ。それに相違ねえ。」みんながそう思っていました。

みんなが集まって伝蔵についている狐払いをすることになりました。それには長久保宿のはずれ東山ひがしやまのふもとにお祭りしてある久津根稻荷様をお願いするのが一番よいということに話が決まりました。

ボタ餅を作りました。厚い油揚げもたくさん作ってお稲荷様に供え神主さんをお願いし、お稲荷様の前で伝蔵を真ん中にして、「狐はお稲荷様のお使いだと聞いています。どうかまじめでお人よしの伝蔵のからだから狐を取ってください。」とみんなまでお願いし、神主さんにお払いをしてもらいました。

あらたかな久津根稻荷様のごりやくがたちまち現われて、それ以来伝蔵は狐に化かされることがなくなり、だれがいうともなく久津根稻荷という呼び名のほかに伝蔵稻荷と呼ぶようになりました。